The Japan Society of Educational Sociology

夜間定時制高校生の「学校」への意味付与に関する研究

― 「編成資源」を手がかりに ―

城所章子（元お茶の水女子大学大学院）

1 問題の所在

定時制高校は戦後、後期中等教育の機会均等を基本的理念にして発足した教育機関である。主に“働きながら学ぶ”勤労青少年、教育機会を逸した社会人のための進学機会を提供し、高校教育の普及に大きな役割を果たした。しかしながら、定時制高校は、その後、全日制高校進学者が増大する中で、その歴史的意義は認められながらも、量的に縮小し衰退してきた。今日では、設立当初の役割は薄れたということで「新しいタイプの高校」へと改編されることも多い。

教育社会学の生徒文化研究や進路研究においては、特に 90 年代以降、方法論の展開の新しい流れの中で、高校生の多様なリアリティに着目する研究がなされてきた。けれども、こうした研究は暗黙のうちに全日制高校のみに着目し、中でも単位制高校などの「新しいタイプの高校」が注目されてきた。これに対して、定時制は片岡（1982,83,90 等）などの研究があるのみで、最近ではほとんど研究対象として取り上げられることすら少なくなってきた。

だが、定時制は働きながら学ぶことを前提として編成され、年齢やキャリアの点でも多様な層の生徒を抱えるきわめてユニークな教育機関である。とりわけ夜間定時制はその特徴が色濃く出ている。それが今日どのような実態にあり、教育効果という観点からどのような役割を果たしているのかを社会学的な観点から究明することは、きわめて重要な課題であろう。

そこで、本発表では、ある夜間定時制高校に通う生徒たちが、学校内外の体験を通じて、どのように自己を捉えなしていくのかのメカニズムと、そこでの彼らの「学校」への意味付与を彼らの視点からを明らかにする。このことを通じて、夜間定時制の教育的な意義を再考することを目的とする。

夜間定時制独自のシステムは生徒へ何を提供しているのか、そこで生徒に萌芽する新しい自己意識や態度があるとすれば、それはいかなるものか。そのような観点からの考察は、定時制を単に階層構造の底辺としてのみ位置づける専攻研究では見えてこない、様々な側面を浮かび上がらせるにちがいなく、「新しいタイプの高校」に転換していこうとする今日の高校教育改革のあり方にも再考をせまることになると思われる。

2 調査の対象と方法

本研究の研究対象は、東海地方に位置する公立夜間定時制X高校である。1 クラス 40 名、各学年 2 クラスから構成される学年制を基盤とした男女共学校である。全国的には夜間定時制は入学者の減少を理由に統廃合及びあるいは「新しいタイプの高校」への変革対象とされる傾向がある中で、X高校はここ数年間、2 次募集が毎年行われながら、量的には安定した入学者を維持してきた。

学年、クラスによって男女比、年齢層は様々なものとなっているが、10 代から 20 代前半の者が占める割合が高く、年度によっては中学校卒業からの「ストレート」入学者が過半数を超えることもある。報告者は対象校において学校生活と学校行事に関するフィールドワークとインタビューを行っているが、本報告の分析の中心となるのは、2004 年 2 月から 6 月まで行った同校の生徒へのインタビュー調査である。

3 分析枠組み―「編成資源」を手がかりに

高校研究では、周知の通り、学校間の格差構造に着目した分析がなされてきた。また、チャーター論においても、生徒は学校チャーターを受動的に引き受ける存在として捉えられ、積極的に選択行為する主体としての能動性は考慮されてこなかった。しかしながら、ウィリスなどの抵抗理論が繰り返し指摘してきたように、個々の主体はそれぞれが置かれた文脈において、同時に他の様々な諸要因に囲まれる中で、それぞれに不断に自己を構成する可変的な意識と態

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

度を持つ主体である。

このような問題関心に立つ本研究の分析のために有効だと思われるのは、ウォルマン（1996）の「編成資源（organizing resources）の概念である。彼女は古典的な経済学の概念である、土地、労働力、資本といった「構造的資源（structure resources）」は社会の中で不平等に配分されていることに対して、万人が利用できる「編成資源」なるものがあり、それをいかに利用するかにより生活のあり様が大きく変わることに着目した。

そこで、本研究では、この「編成資源」の概念を手がかりに、X高校の生徒たちにはどのような「編成資源」が用意されており、それを用いて彼らがいかなる自己意識や態度を培っているのかを分析する。

4　分析結果

（1）夜間定時制独自の「資源」として

夜間定時制では、中学校や全日制高校とはちがい、「3年卒業」のために昼間の時間割を選択しなければ、生徒たちは基本的に夕方から授業を受ける。他の学校との時間帯の相違は「（夕方から遊びに）行きたい時に行けない」、「学校が夜だから、見たいテレビが見られない」といったジレンマが生じる。だが、一方で、生徒たちが「自由」と語る夜間定時制固有の時間帯は、一日の＜時間＞の組み立てを個々の生徒の裁量に委ねる。X高校では入学時に正社員である者の割合は極めて低いが、高校入学後、「自由」な＜時間＞を利用し、アルバイト体験をする者も多い。夜間定時制の生徒が昼間アルバイトをする時間は「大人」と一緒に働く時間帯である。そういった意味では、彼らの職場体験は全日制生徒のそれとは異なっている。彼らは「大人」の世界の中で評価を受けることになり、＜アイデンティティ＞の拠り所の獲得や「学校」と「社会」の境界の揺らぎを経験することとなる。

さらに、トランジッションという観点から夜間定時制の特質に注目すると、複数の中学から選抜された生徒が集まるだけではなく、クラスは異年齢で構成される。そのため「価値観」を含め、集団の多様性が非常に高い。一般的な生徒文化研究では特定の年齢層だけで構成された集団が前提とされ、同質的な他者との社会的相互作用が生じることが想定されている。だが、そうした先行研究とちがい、まず、最初に異質性が提示される「今までにない」他者に出会うこととなる。こうした学校内外の経験を通じて、＜情報＞と＜アイデンティティ＞の拠り所を駆使し、自分の行為を意味づけていくのであった。

（2）＜活動＞の裁量

生徒の語りとこれまでの生徒文化研究から得られた知見に依拠することから、ウォルマンが提示した資源に、＜活動＞という追加すべき資源が浮かび上がってきた。義務教育段階から高校へのトランジッションに伴う生徒の活動の自由度の高まり、すなわち、日常の行動様式や活動範囲における個々の開放性はこれまで注目されてこなかった点である。川野他（1998）は短大入学が人生周期の他の時期よりも自由度が高いことに着目し、環境移行過程モデルを示した。そこでは短大生が環境変化を共通のスケジュールに沿って体験していく一方で、自由度の高さが移行過程の個人差に結びつくとみる。調査対象校の生徒たちは高校入学以前に比べ、「学校帰りに寄り道ができる」、「携帯電話の所有が親から許容された」、「アルバイトをする」といった日常生活の行動の開放性や選択権を自分が所有する自由度の高まりを意識化していた。つまり、生活世界における行動面での何らかの裁量の度合いを意味し、高校生特有の利用可能な資源として、＜活動＞の存在があると指摘できる。

5　考察と今後の課題

生徒たちの語りを資源の取り込みプロセスとして丹念にみていくと、個々の教育環境、社会環境に対する意味付与や価値観を個人の主観を通して把握できるといえる。こうした中で、固有の資源を生徒に寄与した夜間定時制に内在する今日的教育意義が明らかとなってきた。また、高校入学が必ずしも本人の希望によるものではない他律的、消極的進学層が存在したが、そうした生徒たちが現在や将来を決定づける態度性向に重要な資源となっていたのは、「獲得的資本」（宮島、1999）の意味があったと考えられる。さらに、このような視点からみることは、先行研究が階層、選抜に過度に着目することによって看過ごされがちになっていた、生徒が学校や社会にいかに適応していくかという個人の主観的な達成を捉えていくことができるだろう。

※引用文献およびデータの詳細については、当日提示します。

NII-Electronic Library Service